

はい、こちら人材派遣
会社〈リマイン〉です

しゃろむん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは七人目のカンピオーネ蒼桐宗助が権能を駆使したり仲間達と力を合わせたり
してひつそりと派手に戦っていくお話です。

物語は原作二巻からスタートします。初っ端から侯爵が登場します。オリ主出ます。
オリキャラも出ます。そういうのがダメな方は即ブラウザバックでお願いします。作
者の神話の解体はお粗末なので、過度な期待はしないように。

以上のこと踏まえた上で、本作をお読みください。

※誤字訂正、感想などいただけると作者は歓喜します。

目 次

第一話 「代表取締役の蒼桐宗助です」

1

第二話 「それだけでいいんだ」 —

第三話 「まだまだ子供だね」 —

第四話 『イエーイ!』 —

35 25 13

第一話 「代表取締役の蒼桐宗助です」

カンピオーネ。それは神話の世界に存在する神々を殺逆せしめた人間を指す人類最高の称号。彼らは神々から篡奪した唯一無二の権能でもつて神々、ひいては同類であるカンピオーネとの闘争に身を投じていく。

激しい豪雨の中、都心から少し離れた墓地で、少年が手をあわせていた。年の頃は17、18くらいか。黒いスーツにフレームの細い銀縁眼鏡をかけているがそれが、これから直接に向かう学生のようなアンバランスさを醸し出している。

「……」

あわせていた手をそつと解いて立ち上がる。雨足は早くなる一方で、それが同時にタ

2 第一話 「代表取締役の蒼桐宗助です」

イムリミットを示していた。

「そろそろ行くよ、叔父さん。また東京は荒れるだろうけれど叔父さんはそこで父さん達と高みの見物でもしててよ」

少年——蒼桐宗助——はどこか懐かしむように墓前に語り掛け、墓地をあとにした。

時間は少し遡る。

「社長、正史編纂委員会の方からお電話です」

あまり綺麗とは言えない事務所に青年の声が響いた。

「ん。また甘粕さん？」

『社長』と呼ばれて返事をしたのは少年、蒼桐宗助。今年でまだ17歳と未成年だが一応、れつきとした一結社の一首領である。

「いえ、今回は彼の上司にあたる人物です」

一方、宗助を社長と呼んだ人の好さそうな顔をした青年は御手洗槐。今年で27歳になる元密教の破戒僧。そろそろ将来の相手を探し始めた方がいいんじゃ……と他の社員に言われたり言われなかつたりする青年（？）である。ちなみに課長。

「もしもし、お電話変わりました。こちら人材派遣会社〈リマイン〉代表取締役の蒼桐宗助です」

返ってきたのは男女区別が着き難いほどに中性的な声だつた。

『こんばんわ。正史編纂委員会東京分室室長の沙耶宮馨です』

正史編纂委員会とは古くから日本の呪術業界を取り仕切つてきた日本最大規模の呪術結社である。そして沙耶宮家と云えば、その中でもトップに君臨する四家に連なる一族である。

「沙耶宮……それに室長ですか。そのような方が今日はどのような？」

『〈リマイン〉の実績を見越して日本の危機回避に尽力してほしい』

日本の危機とはまた大袈裟な……とは一概にも言えないか。なにせついこの間、東京に「まつろわぬアテナ」が降臨したばかりなのだから。……まあ、その時は〈リマイン〉も社員総出で裏方作業に徹していたのだが（宗助だけは他用で海外にいた）。ちなみに前回の事件は日本に唯一『……』存在するカンピオーネ、草薙護堂が撃退した。（また神様？ それともどこぞのカンピオーネでも来日してきたのかな？）

どちらにしても日本にとつては迷惑極まりない。件の草薙護堂と戦つたというイタリアの『剣の王』サルバトーレ・ドニは療養中と聞いているのでおそらく無いだろうとしても、バルカン半島を根城にする現存最古の魔王、サー・シヤ・デヤンスター・ヴァンや中国の魔術結社（五嶽聖教）の教主である羅濠教主、何をしているのかまったくもつて謎なアイーシャ夫人、他にもイギリス（王立工廠）の総帥アレクサンドル・ガスコインや『ロサンゼルスの守護聖人』ジョン・ブルートー・スマスも何かしらの理由があれば来日するだろう（可能性は低いが）。

「…………何がありました？」

『ヴォバン侯爵が来日しました』

「…………最悪だ。ヴォバン侯爵と言えば常に闘争に飢えていることで有名なカンピオーネだ。彼の欲求不満で廃都と化した都市は数知れない。そんな人物が日本に来日することは、なるほど確かに日本の危機かもしねれない。

「今はどういった状況ですか？」

『それはこちらの依頼を受けてくれるということですか？』

「内容によりけりです。魔王を相手取れと言われたらこちらが全滅しかねませんからね」

『流石にそんなことは言いませんよ。目には目を歯には歯を魔王には魔王を、ヴォバン

侯爵は草薙護堂さんに相手をしてもらいます』

確かに毎日暇を持て余しているらしいヴォバン侯爵には効果的な策である。

が、しかしだ。

『それは彼が戦うことを承諾することが前提の話でしょう。聞くところによれば彼は平和主義を謳っているとか』

『それについてはおそらく問題無いでしょう。これについては依頼内容に関わってくるので先に内容を話します。今回の依頼はある媛巫女の護衛です』

「護衛、媛巫女の・・・？」

『はい、その媛巫女こそがヴォバン侯爵の目的だそうで』

ヴォバン侯爵、媛巫女。この二つのキーワードに宗助は心当たりがあつた。

「まつろわぬ神招来の儀式」・・・！」

【まつろわぬ神招来の儀式】とは4年前、ヴォバン侯爵が主催した儀式のことで内容は「世界中から召集した30名弱の優秀な巫女を使って人為的に「まつろわぬ神」を降臨させる」というとんでもないものだ。だが事実、儀式事態は成功。しかし結果は巫女の三分の二が精神に重大な障害を残し、降臨した「まつろわぬジークフリート」はヴォバン侯爵ではなくサバトーレに倒される始末だ。

『・・・おそらくは。ここで先ほどの話に戻りますがその狙われている媛巫女が草薙さん

の学友、なおかつ先日のアテナ戦でも色々あつたようで、向こうからの印象は悪くないようでした。その上草薙さんは情には厚い方のようですから』

「そうですか……。わかりました、その依頼受けましょう。しかしそのかわり三つ条件があります』

『……何でしよう』

「条件は派遣する人材と護衛する場所、護衛する上での手段です。この三つについての自由権を許可していただきたい』

『……わかりました。ではすぐにそちらに向かいますので』

そして話しは冒頭に戻る。

宗助が事務所に帰つてすぐに迎えが来た。車から降りてきたのは4人。運転席から降りてきたのはいつも通りヨレヨレのスーツを着た男性、甘粕冬馬。助手席から降りて

きた平均よりも身長が高めの少年、どことなく一般人と離れた雰囲気を感じる、おそらく彼が草薙護堂なのだろう。そして後部座席から降りてきた金髪と茶髪の二人の少女。金髪の見るからに異国人な彼女は〈グリニッジ賢人議会〉のレポートにあつた草薙護堂の愛人、エリカ・ブランデツリ。見た目十代半ばだが、この年すでに大騎士の階級にいるこの世代ではトップクラスの天才魔術師である。そして後ろに立っている見るからにおしとやかそうな巫女服を纏つた茶髪の少女が、今回の護衛対象である万理谷裕理なのだろう。

「はじめまして、人材派遣会社〈リマイン〉代表取締役の蒼桐宗助です。よろしくおねがいします。あなたが草薙護堂さん？」

「あ、ああ。はじめまして、草薙護堂です、蒼桐、さん？」

宗助が代表取締役と聞いて驚いたのだろう、護堂は少し戸惑いながらも挨拶を返した。

「あはは、敬語じやなくてもいいよ。年はたいして変わらないんだから」

「じゃあ、蒼桐、でいいのか？なら俺も敬語じやなくてもいいよ。それより今はあまり時間が無いから手短にしたいんだが」

「その通りよ。だからここは、早く裕理を護る〈リマイン〉と侯爵を倒す私達とで別れた方がいいわ」

護堂の言葉をエリカがつなげる。宗助を見る目が険しいのは今この状況の他にも、
「リマイン」がこの場において信頼できるのかを危惧しているからなのだろう。

「そうですね。ですが、最初から二手に別れてしまうとこちら側にヴォバン侯爵が来て
しまう可能性があるので何処か別の場所に移動した後、ヴォバン侯爵が現れてから別行
動を取る、それでいかがでしよう?」

「……確かに一理あるかもしけないけれどそれは侯爵が現れてからでもあなた達が逃げ
切れるのが前提よ。はたしてそれは可能なのかしら?」

エリカの疑問ももつともだ。人間を眼中にいれないまつろわぬ神から逃亡すること
すらが奇跡だと言うのに、人間、魔術師を意識しているカンピオーネから逃亡するとい
うのは初めから仕組まれたギャンブルをするようなものだろう。もちろん仕組んだの
は向こう側で仕組まれたのはこちら側だ。

「はい。場所に指定はあります、可能です」

しかし宗助はそれを何の気負いもなく可能だと言つてのけた。

「ここから車で約10分程進んだところに小学校があります。そこなら逃亡に必要な条
件は揃つています。それにあそこの広さなら多少派手に暴れても大丈夫でしょう」

この時間なら人もあまりいないでしようからね、と最後に宗助は付け足した。

車を走らせること約5分、ヴァオバン侯爵が提示したらしい30分がたつていた。

「なあ・・・」

「どうしたの？護堂君」

「これはちょっと窮屈すぎないか？」

「そう申されましてもこの車は元々4人乗り用ですからねえ」

現在の位置順は、運転席に甘粕、助手席に宗助、後部座席に護堂、エリカ、裕理となつていて。後ろの三人が窮屈なのも仕方ないだろう。

「悪いけどもう少し我慢してしてくれるかな。あと5分もすれば・・・・・」

「どうした？」

突然黙つた宗助に護堂達が訝しむ。しかし宗助の目線はバックミラーに向けられたまま。

「んー、思ったよりも早かつたですねー」

同じくバツクミラーを覗いた甘粕はうつすらと冷や汗をかいていた。

「後ろよ護堂！」

二人が視たモノにいち早く気が付いたエリカが護堂の肩を引く。そして振り向いた
護堂の視界には、

「あれは・・・狼、なのか？ やけにデカいな」

大きな灰色の影が道路を疾走していた。見た目は狼だがサイズがどう見ても異常
だつた。馬と見まがうほどに巨躯なのだ。しかも徐々に車との差が縮まつてきている。

貪リージョン・オブ・ハングリーウルヴスる群狼。賢人議会のレポートによれば、ヴォバン侯爵はあるの權能で何百も

の魔狼を召喚、使役できるというのだ。そしてそれすら彼の能力の片鱗だというのだから
ら笑えない。

「・・・甘粕さん、後ろの狼は僕が足止めしますから少し急いでください」

「おい！ 足止めって何をする気だよ！」

「決まってるじゃないか。ここから射ち落とすのさ！」

言うや否や、宗助は助手席のドアを開けて車体の枠を掴み、屋根に飛び乗る。

「さて、魔王様も見ていることだし、しつかり仕事しないとね」

立ち上がった彼の手にはいつのまにか大きな弓が握られていた。そして腰にもこれ

また何処からとりだしたのか矢筒が装備されている。

無言で矢をつがえ、見るからに強そうな弦をキリキリと引いてゆく。

バシユツ

と、子氣味の良い音を立てて矢は一直線に狼の群れに向かい、ツト、と小さい音を立て狼の額に命中する。しかしそれで終わりではない。なんと、命中した矢はまだまだ飛べるぞとばかりに狼の額を破つて直進。そのまま後列に続いていた狼三匹の額を打ち破り、四匹目の狼の額でやつと活動を停止した。

「なんだ、今の。魔術を使つたのか?」

これには都合3柱の神々と戦つてきた護堂も驚いた。

「いいえ、魔術を使つた形跡は無いわ。おそらくあの弓、もしくは矢の方に貫通の術式が込められているのよ。だからあれは使う時に呪力を流し込むだけで使えるのよ」

そう確かにエリカの言つた通りこの矢には社員の一人に貫通の術式を組み込んでもらつたものだ。しかしそれだけではない。この弓はカンピオーネである宗助が権能を用いて作り出した云わば即席の神具なのだ。

しかし、

「うーん。これじゃあ中々数が減らないなあ」

そう、いくら一撃で四匹減らせたとしてもだ、相手は數十四。しかも段々と増えてい

る。これではジリ貧である。

「よし、ならこうしよう」

なので作戦を変えることにする。

新しい矢を構え、射る。今度は少し奥へ、前列の狼達を2列ほど飛び越えるように射る。落下地点にいた狼に命中する。

ボンツ

と、一昔前のゲームの爆弾のような音を発して矢が弾けた。最初に命中した一匹はもちろんのこと、その爆発にまきこまれて計十匹程の狼が吹き飛んだ。

「おお・・・、これは思つてた以上に強力だな」

それからはさながら爆撃のように矢が雨霰と降り注ぎ、狼達は遂に一匹も車に到達することはなく、一行は小学校に到着した。

第二話 「それだけでいいんだ」

狼達を蹴散らしながら一行は宗助が指定した小学校に到着した。しかしここで少し問題が起きた。

ここに来て裕理がやはり自分が投降すると言い出したのだ。顔つきを見るかぎりそれは责任感からか。元々生真面目で责任感が強いことは彼女の長所であるが、今回においてそれは短所となってしまう。舞台が整い今まさに役者が壇上に上がるうとしているところに監督が待つたをかけているのと同じだ。

しかし裕理の選択自体は間違つてはいない。むしろ最善の選択だ。もしこのまま護堂とヴォバン侯爵が激突すればいくら開けた場所といえど確実に被害が出るだろう。しかし裕理が投降すれば被害は裕理一人で済むのだ。

「それは言つちや駄目だよ万理谷さん」

しかしそれをだれよりも早く否定したのは護堂でもエリカでもなく、宗助だった。

「しかし蒼桐さん。このまま草薙さんとヴォバン侯爵が戦えば必ず周囲に大きな被害が出来ます！でも私一人が『犠牲になればそれでいい？』……、そうです。私がヴォバン侯爵の下へ行けばそれで済む話しの筈です！」

「うん、確かに君の言う通りだ。それがベストだ。それが多分一番美しい終わり方だ。はつきり言つてこの戦いに意味があるのかつて言われたら微妙なところだよ。でもさ万理谷さん、君は聖人君子になりたいの？違うんじやないかな。君はきっと自分の責任に耐え切れないんだ」

「……それは、私が逃げていると？」

「まさか、むしろ君は立ち向かっていると言つてもいいだろうさ。なにせあの泣く子も黙るカンピオーネ相手に自分の意見を通そうとしているんだから」

おどけた様に言う宗助に裕理は今そのことに気づいたかのように顔を背けた。
「まあ、とにかく君の言つてること自体は正しいんだ。でもそれはこの場においては適切ではないんだ」

「正しくも適切ではない……」

「そう。まず思い出してみなよ。なんで護堂君が戦うのかをさ」

「……」

背けていた顔を上げて裕理は護堂の顔に視線を合わせた。二人の目線が合う。

「……俺はあまり頭とか良くないから理屈とかはよく分からない。けれど君は俺を助けてくれた友達で、これからひどい目にあうんだと思う。だつたら、そんなの見捨てるわけにはいかないだろ？——これは俺の我儘なんだよ」

言いながら、護堂は手を差し伸べた。あとはこの手を裕理が取ればいい。

「これで分かつたんじゃないかな。彼は君のために、誰でもない君だけのために戦うんだ。それなのに君はまだここで正しいだけの道を進む気かな？」

「俺はあるのじいさんから君を守れればそれで満足なんだ。それだけでいいんだ。なあ、頼むよ、万理谷」

どうかこの手を取ってくれ。

「さあ、ここまで言わせたんだ、あとは君がどうしたいかだ」

まだ少し迷いを見せる裕理に宗助がにこやかに後押しをかける。

「……まったく、仕方のない方ですね。普段はまじめのことを言っているのにこういう時はいい加減なんですから。蒼桐さんもです。このようなことを言う人には見えないのに」

あきれたように言う裕理に性分だからねーと宗助は笑つて返した。

「ですから、私ももうあなた達を説得しようなんてバカなのはいたしません」

辛辣にも聞こえるが彼女の顔はとても穏やかだった。

その時だった。

ゴオオオオオと、風が唸りを上げた。降りしきる雨が顔に当たつて鬱陶しい。彼が来たのだろう。サーチャ・デヤンスター・ヴォバンが。

「待たせたな小僧。私に押しつぶされる覚悟はできているか」

風が吹き荒れ、雷鳴が轟く中でも、ヴァオバン侯爵の知性を感じさせる声はここにいる全員に届いた。

「ほう、なにやら先程の会合の場にはいなかつた輩が紛れているな。一応訊いておこう。貴様は何者だ?」

「お初にお目にかかります。この極東の地にて魔術結社〈リマイン〉の首領を務めております、蒼桐宗助と申します。今夜は噂に名高い魔王、ヴァオバン侯爵と七人目の魔王、草薙護堂様が決闘をなさると聞いて一役買いに参上した所存にござります。ああ、もちろん決闘の邪魔をするつもりは特にありませんので、こちらはただのエキストラ、とでもお考えください」

「ふん、そうか。まあいい」

ヴァオバン侯爵の問いに宗助は恭しく腰を折つて答えた。いつそ慇懃無礼ともとれるがヴァオバン侯爵は大して気に留めなかつた。もう興味は無いとばかりに宗助から視線を外し、護堂に顔を向けなおす。それを見て宗助は人知れず笑みを浮かべた。そして社員の一人に念話を飛ばした。

「それでは私どもは一旦退場いたしましよう。後はお二人が心赴くままに決闘に興じられてください」

その言葉と共に呪力が逆り、裕理が消えた。まるで神隠しの如く人が一人消えた。その現象に宗助を除く全員が驚愕した。エリカも護堂もヴァン侯爵でさえも。しかし、宗助は知らぬ存ぜぬとばかりに背を向け、軽やかに地を蹴つて飛び去った。

こうして、宗助と裕理はまんまと二人の魔王から逃走してみせたのだ。

呪力を感じ取った瞬間、裕理は屋内に居た。見覚えの無い部屋だ。少し乱雑とした事務所のような部屋。そこの応接間のようなところに裕理はいた。

「此処は、いつたい・・・」

「ん。あー、よかつた。ちゃんと成功した。まつたく、ウチの社長もいきなり無茶を言つてくれるよなー。はいアンタ、これで頭拭いときな」

「いつ!？」

真横からの突然の声に裕理は思わず声を上げてしまい、慌てて口をふさいだ。声をか

けてきたのは長い金髪を後ろで一つに束ねた妙齡の女性だつた。

「なんだよ。別に取つて喰つたりはしないよ」

「あ、あの」

「ん？ ああ、そうだ自己紹介がまだだつた。悪い悪い。あたしはサリー。サリー・ウイルソン。よろしく」

サリーと名乗つた女性は裕理に白いタオルを手渡した。

「ありがとうございます。万理谷裕理です」

裕理もタオルを受け取り自己紹介をする。

「聞いてるよ。あの侯爵様に目付けられるなんて、アンタも運が無いねえ。あ、タバコ吸つても平氣？」

「はい、構いませんが・・・」

どうも、と言つて彼女はそのまま換気扇のしたでタバコを吸い始めてしまつた。

「・・・」

沈黙が痛い。

「・・・あの」

沈黙に耐え切れず、裕理が口を開いた。

「ん？」

吸い終わったタバコを消しながらサリーが振り返る。というかもう吸い終わったのか。なんとなく彼女がヘビースモーカーだとうことがうかがえる。

「何故私は此処に？それと此処はいつたい何処でしようか？」

「此処は〈リマイン〉の事務所。そしてアンタがここにいるのは事前に社長があたしに合図をしたら此処に連れてくるように命令したから。Do you understand?」

簡潔な説明の最後はとても流暢な英語で締めくくられた。そしてこれで言うことは終わりとばかりにサリーはまたタバコを吸い始めた。たつた三文で会話が終わってしまった。別に裕理は話したがりというわけではないが、流石に今後このまま無言で過ごすというのは気まずい。というわけでまたもや裕理から話題を振ることにした。キヤラではないがやはり気まずすぎる。

「こちらは人材派遣会社と聞きましたが具体的にはどのようなことをなさっているのでしょうか？」

「んー、ウチはあまり裏も表もなくやつてるから実際のところはほとんど何でも屋だよ。おーそうだ」

何か思い出したかのように吸い終わったタバコを消しながら懐を探り出すサリー。まったく一日にいつたい何本吸っているのか聞いた大したくなるほど早い吸い終わり

だ。

「はいこれ。ウチの名刺」

差し出されたのはとくに呪力が籠もつてゐるわけでもないただの名刺だつた。名刺には

「人材派遣会社 〈リマイン〉 副社長 サリー・ウイルソン」

とあつた。サリーは副社長らしい。そして下には、

「迷える猫探しから荒ぶる神獣退治まで、相談事は 〈リマイン〉 まで」

幅が広いにも程がある。というより俄かに信じがたい。神獣とは文字通り神の獣。まつろわぬ神やカンピオーネの足元には及ばないにしても、人類にとつては十分すぎる脅威である。それを退治できると聞けば疑つてしまふのもしかたのないことだろう。確かに例外は存在する。例えば、エリカ・ブランデツリが所属する 〈赤銅黒十字〉 の現総帥パオロ・ブランデツリや 〈百合の都〉 最高の騎士聖ラファエルあたりか。それ程の者達でも必ずしも勝てるというわけではない、それが神獣である。

「あー、疑つてるね。まあそれが普通の反応だよ。流石にウチも全員が全員神獣の相手をできるわけじやないよ。できるのはあたしと御手洗、そして社長の三人。あと三人社員はいるけどアイツらには流石に荷が重いかな」

腕は悪くないんだけどね、と3本目のタバコに火をつけるサリー。

「流石に吸い過ぎなのでは……？お身体にもあまりよろしくないかと……」
これには裕理も苦言を呈した。

「大丈夫大丈夫。これ、ニコチン入つてないから。これは体内の呪力の毒素を分解してくれる裏じゃ結構一般的なものだよ。ま、あたしは元々ヘビースモーカーだけどね、今は禁煙中。さつきかなりの呪力を使つたからいつもよりも多めに吸つてるつてわけ。ただ煙たくなるからこうして換気扇の下で吸つてるんだよ」

言いつつ煙を吹かすサリー。どれくらいが適量なのか裕理にはわからないがもうかなりのハイペースで吸つているところから察するに言葉通りかなりの呪力を消費したのだろう。そういえば裕理はどうやつて自分が此処に連れてこられたのかを聞いていなかつた。

「あれだよ、アンタを連れてきた術式は俗に言う瞬間移動つてやつだ」
瞬間移動。

マンガやアニメ、フィクションでは時々出てくる能力だ。効果は知つての通り、人や物を一瞬で移動させる能力だ。だがそれを魔術で再現するととてもない時間、コスト、呪力が必要となつてくる。時間と呪力は術師を増やせば減らすことも可能だがコストは減らせない。そしてヘルマインが今回の仕事を引き受けたのは精々一時間程度のこと。たつたそれだけの時間で人一人を瞬間移動させられるだけの呪物の種類、人

材が「リマイン」には揃つてているということになる。あくまで聞いた限りではあるが、それをサリー一人で行つたということ。サリーの力量がとてつもないものだと嫌でもわかつてしまふ。これなら神獣を相手取れると言われてもうなずけるかもしない。そしてその上に立つ宗助の実力がいつたいどれほどのものなのか。

「瞬間移動と一口に言つてもあたしがやつたのは靈脈から靈脈への転移なんだけね。アンタらがいた小学校とこの事務所は靈脈の上に建つてゐるんだよ。だから比較的短時間で術の用意ができるたつてわけ。社長の目的は第一にアンタをあそこまで安全に送ることだからね。第二の目的は追つての錯乱」

「それでは蒼桐さんが！」

裕理が悲鳴のような声を上げる。いくら神獣と渡り合えるとは言つても宗助を追つてゐるであろう相手は死人と言えど元はそれぞれがそれぞれ一流の騎士や魔術師達、それにあの魔狼だ。いくらなんでも多勢に無勢。そう思うのは仕方ないだろう。

「いや、大丈夫でしょう。なんてたつてあの社長、あたらしく五人が束になつても太刀打ちできないような奴だし」

「ツクシユン！あー、これは誰かうわさしているな」

一方、宗助はサリーの言つた通り今回登場していない（御手洗含む）社員三人が張り巡らした人払いの結界によつて無人となつた東京の一角を走り回つていた。後ろには貪る群狼によつて呼び出された魔狼の他にもヴオバン侯爵のもう一つの権能である死せる従僕の檻によつて召喚されたかつてヴオバン侯爵によつて殺され、強制的に隸属させられた勇者達のなれの果てが追つてきている。これらに追い回されるのは想像するだけでも恐ろしいことだろう。なにせ片や今にもこちらを食い殺さんとする獰猛な狼、片や文字通り目の死んでいる歴戦の猛者達。片方だけでもそちらの魔術師にとつてはその場で命を投げ出すだろう。だが宗助はカンピオーネだ。そちらの魔術師とは一線を画する存在だ。はつきり言つて時折後ろから飛来してくる魔術や矢も振り返ることなく対処可能であるし、機能を使えば後ろの軍勢をただの鳥合の衆として蹴散らすことだつてわけないのである。しかしそうするわけにもいかない。機能を使う、馬鹿げた呪力を使う等をしてしまえば自分がカンピオーネであることが世間にばれてしまう。面倒ではあるがそれは困る。もちろん、いすればばれてしまうことだと理解してい

る。だが、やはりできる限りは正体がばれないようにするのが自分のためであり、社員達のためである。

「でもやつぱりこの力のセーブにもそろそろ限界かもしれないなあ」

後ろの軍勢を『召喚』の魔術で取り出した投槍で牽制しながら宗助はひとりごちた。もうすでに4年だ。自分が神殺しになつてからもう4年。今までよく隠してこれたと我ながら思う。それにそろそろ潮時だとも。まあそれでもまだ宗助自身には正体を明かすつもりは毛頭ないのだが。

第三話 「まだまだ子供だね」

風雨に打たれる中、宗助は思考に耽っていた。

今でも時々、思い出す。4年前のこと。

4年間。はたして長いのか短いのかわからないが、とにかく4年間。まあ色々あつた。両親を早くに亡くした僕は母方の叔父さんに引き取られた。確かもう少しで14歳になるという頃、その叔父さんの仕事の関係で訪れたギリシャの地で降臨したまつろわぬヘパイストスを殺して神殺しとなつた。神殺しとなつて1年くらいたつた頃、叔父さんが亡くなつた。病死だつた。医者によればガンだつたそうだ。そんな素振りは一切見せなかつたけれど、叔父さんは死んでしまつた。祖父母もおらず叔父さんも独身だつたため、僕は15歳にして天涯孤独となつてしまつた。それが原因で学費が払えなくなつて通つていた高校は自主退学。それから半年間、組織のしがらみが嫌だつた僕は

神殺しだとバレない様にバイトをしながら食い扶持を稼いだ。バイトをする魔王、なんか聞いたことのあるフレーズだ。それはいいとして。そんな時、借りていたアパートにサリーサンと御手洗さんが来た。叔父さんの血縁者として、書類上だけでも社長になつてほしいとのことだつた。もちろん魔術に係わつて自分が神殺しだとバレたくなかつた僕は最初断ろうとしたのだが、御手洗さんに言いくるめられてあれよあれよという間に社長の座に納まつてしまつた。今はそれで良かつたと思つてゐるがあの時は憤りさえ感じていた。でもそれから権能の掌握から始め、呪術を覚え、自分で依頼をこなしたり、新しい社員をスカウトしたり。時には社員総出でまつろわぬ神と戦うようなことだつてあつた。そうやつてみんなと触れ合つていく中で段々と憤りも感じなくなつて、信頼も得られるようになつて、自分が社長なんだつて自覚を持つようになると同時に、自分がみんなの前に立たなくてはならないという責任感も生まれた。だからこそ、できる限り自分がカンピオーネだとバレるわけにはいかない。確かに世間にカンピオーネだと知られれば僕自身はもちろん、〈リマイン〉も（裏の）社会的地位を得られるだろう。しかし、それは様々な組織の思惑があつて得られる地位だ。仕事だつて民間のものを除けば神獣やまつろわぬ神相手のものがほとんどになつてしまふかも知れない。それではカンピオーネである僕はともかく、あくまで普通よりは強いだけのみんなは確実に命を落としていくだろう。例え一見普通の依頼だとしてもその中身は如何にして

こちらに取り入るか、取り込むか等という真つ黒な打算が込められた依頼に早変わりする。

駄目だ、それは駄目だ。そんなことは許さない。この僕が許さない。本当は今回の依頼だって受けたくはなかった。はつきり言つて僕としては見ず知らずの媛巫女一人よりも断然、みんなの方が優先度は上なのだ。もちろん話しを聞けば気の毒だと思うし同情もするだろう。さつきあんな風に説得しておきながらこんなこと言うのはおかしいことだろうけど、さつきの言葉が嘘というわけではないけれど、本心はそうだ。だから断るつもりだつた。しかし、カンピオーネ同士が戦うとなれば話しは別だ。カンピオーネの権能は能力がどうであれ、必ず周囲に影響が出る。そんな存在が目と鼻の先で戦えばこちらに被害が及ぶには必然。ならばと、今回の依頼を引き受けた。だがこの戦い、別に護堂君が戦いで『勝つ』必要は無い。ゲームのルールは夜明けまで万理谷さんを守り抜くこと。だから勝つ必要は無い。せめて負けさえしなければ引き分けでも構わない。まあそうは言つてもカンピオーネである以上、両者は全力で相手を潰しにかかるだろうし、個人的にも護堂君が侯爵の鼻つ柱を折つてくれたほうが気分がいいのだけれど。それはともかく、護堂君に負けてもらつては困る。護堂君が勝てば、話しのわかるがりまくつて「興が乗つた」とか言つて東京を吹き飛ばすような暴挙をしてかすかもわ

からない。知的な印象を受ける彼の風貌だが中身はただの災厄の化身だ。そしてそれが許されてしまうのが神殺し、カンピオーネだ。日本では羅刹の君なんて言うけれど、まんますぎて笑えない。だからこそ、僕は可能な限り万全の態勢でもつて臨まなければならぬ。すべては社員達のために。僕自身のために。

宗助が自らの決意を再確認していた頃、〈リマイン〉の事務所がある三階建てビルの屋上に赤い傘をさした黒い艶のある髪をショートカットにした少女が立っていた。少女はなにかに集中するようにジッと目を瞑っている。少女の名前は藤咲凜。道教の術を専門に使う呪術師である。

目を瞑つているだけだつた彼女の口から言葉が発せられた。

「太上老君 普在萬芳 道夢普應 三界之内 六合之内 順之者吉 逆之者兎 勅命一
到 雷霆行 弟子有難 幸願汝偕 逢凶化吉 化殃殆為祥 急速急來応願」

紡がれるのは老君神呪と呼ばれる大陸の最高神格である太上老君に祈願することであらゆる魔術を中和・霧散させる術式である。しかし、凜はこの老君神呪に独自のアレンジを加えることによって、魔術の中和・霧散から魔術の干渉能力低下に変化させた。それを可能とする彼女の才能とビルの建ち位置が靈脈の上、という特徴が重なることで、ヴォバン侯爵の魔狼や死せる従僕達の探索から裕理を守っているのだ。

「……まつたくもう。宗助君も無茶を言うわ。カンピオーネの探索から身を隠せだなんて。私一人ならともかく、ビル丸ごとひとつ隠すのがどれだけ大変だと思つてのかしら」

ぶつぶつと小言の多い彼女だが、神獣と渡り合える程ではないにしても防御力に関しては〈リマイン〉でも屈指の力をみせる実力者である。しかし会社の中ではアルバイト扱いなので立ち位置は低い。

「終わつたー？身体冷えるからそろそろ戻ろうよー」

術式のチェックをしていた凜の背後から声がかかつた。だがここには人間は彼女一個人しかいない。

「今術式に綻びがないか見てるんだからちよつと待つてなさい」

「綻びのないモノなんて存在しないんだからそんなことしてもあまり意味は無いと思うんだけどねえ」

「猫だ。黄色い首輪をつけた白猫がしゃべっていた。

「そんなこと言つたつて葵さん、一応見直しておかないと不安になるじゃない」

葵と呼ばれた白猫は大きく伸びをして答えた。

「不安になるくらいなら最初からやらなきゃいいじゃない」

それは言つちやだめだろう・・・。

「・・・元も子もないこと言うわね。・・・まあいいわ。どうせいつも自分の身体をとつかえひつかえしているような葵さんにはわからないことよ」

チエツクが終わつたのか、踵を返した凜はフン、と鼻を鳴らして一人足早に中に戻つてしまつた。

「まだまだ子供だね。いや、私も十分若いけどさ」

薄く笑いながら、凜を追つて葵も屋上を後にしてた。

公塚葵。毎日出社する幽霊社員。趣味は動物の身体を借りて生活すること。

もう一度視点は宗助に戻る。

いまだに宗助は追つてを撒けないでいた。彼が思つていた以上に魔狼も死人達も優秀だつたようだ。しかしだいぶむこうの頭数も減つてきたように思える。

「・・・鬼ごっこもやつと終盤かな」

地を大きく蹴つて跳躍。弓の弦を引き絞り、高度が最大まで上がつたあたりで撃つ。死人相手では撃墜されるので目標は狼達。使つた矢は初めに使つた物よりも大きい爆発を起こして狼達をけしさつた。

「さーて、もう一頑張り」

地に降り立ち、双剣を構える。眼前には数世紀前の甲冑を纏つた騎士達、後ろにはすでに詠唱を始めている魔術師達。いずれも歴戦の猛者だ、負ける気はしないにしても手は抜けない。

先頭の騎士が大剣を振り下ろす。それを受け止めるようなことはせずに大剣の腹に左の剣を当てて軌道を逸らす。前傾姿勢になつた敵の右側に回り込み、首を刎ねる。敵が呪力の塊となつて消える前に奥に思い切り蹴り飛ばす。詠唱をしていた魔術師の一人に当たり転倒する。しかし他の魔術師の詠唱が終了し、宗助に6つの火球が殺到する。足元に呪力を込めて小規模の爆発と共に跳躍。魔術師達を飛び越え、着地と同時に

飛びかかる。が、後方に待ち構えていた騎士達に阻まれた。仕方なく応戦するが、また詠唱を始めた魔術師達を見て宗助は小さく舌打ちした。死人である彼らだが、ある程度の連携ができる分、射撃だけで倒せる狼達よりも掃討にかかる時間も労力も多くなる。

「仕方ない。あまり使つたことはないんだけれど」

双剣を捨て、新たに両手に呼び出したのは二挺の銃。M P 5と呼ばれるサブマシンガンだ。サブマシンガンの中ではそこのスタンダードな銃なので大体の人は知っているだろう。それを両手で構えて再び跳躍。左手は着地点の騎士達、右手は真下の魔術師達に向か、フルオートで引き金を引いた。ガガガガツと連続して響く音。それに混じつて金属と金属が当たつて弾ける音、そしてなにか柔らかなものを貫く音が聴こえてくる。騎士達は自らの得物で魔術師達は障壁を張つて防御しようとする。盾で弾く、もしくは剣で弾く騎士達の幾人かは難を逃れたが、魔術師達は違つた。銃弾が障壁を破つてしまふのだ。原因は矢と同じく銃弾で、この銃弾にも呪術的細工がしてある。騎士達には通用しなかつたようにこれは魔術にしか効果を發揮できないが、効果は見ての通り典型的な魔術師に対してはかなり強力な武器になる。

「毎度毎度ウチの社員はいい仕事をするよ。まあ、性格は少しアレだけど」

細工をした社員を思い出して苦笑する宗助だったが、すぐに顔を引き締める。全弾撃ち尽くして魔術師達は呪力の塊となつて消えたがまだ騎士達が残つている。弾切れに

なったＭＰ５を放り棄て、着地する。そうなると騎士達のど真ん中に着地した宗助は必然的に包囲される形になる。普通なら危機を感じるところだが宗助は全くそんなことは思わず、案外減らせてラッキーなどと考えていた。

「それじゃ、最終ラウンドってことで」

無手のまま構えない宗助に業を煮やしたのか、三人の騎士達が斬りかかる。前、左右から振り下ろされる刃。後ろにはおそらく回避した宗助を仕留めようと他の騎士が刃を向けて待機していることだろう。

「——よつと」

右の刃は右手で、左の刃は左手で。左右の剣の腹を外側から叩き内側に押し込んでクロスさせ、前方から迫る刃に当てる。宗助から見てちょうど＊のような形になる。

「フツ！」

一瞬の膠着。左腕に力を籠め、三つの刃を押しやる。引つ張られた騎士の脇腹を蹴つて距離をとり、懷から取り出したナイフを逆手に握り後方から突き出された槍の起動を逸らす。振り返る遠心力で後方回し蹴り。甲冑を纏い見るからに重量のある騎士が身体を浮かせて吹き飛ぶ。

「次はこちらから行こうか！」

白兵戦では常に受け身からの反撃だった宗助もやつと攻めに転じた。

ナイフを握り直し、前方の騎士に高速で肉薄する。リーチの短さを生かして近距離から振られたナイフが騎士の肘裏をとらえ、そのまま切り落とした。身体の一部を無くしたことによつてバランスを崩した騎士の首を刎ねる。身体がほつれた騎士を一瞥し、また違う騎士に狙いを定める。斧を携えた騎士を標的にした宗助は相手が斧を振り上げる前にナイフを投擲。フルフェイスの兜に開けられた敵を見るためのわずかな穴。つまり眼球にナイフを突き刺した。刃が見えなくなるまで深々と刺された騎士は為す術もなくその場で活動を停止した。

そこから事は一方的に進んだ。神速すら見極めことが可能な騎士達だつたが、時間を操作する神速と違い、ただ素早いだけの宗助の動きは捉え難く、遂に手傷一つ負わすこと叶わざずヴォバン侯爵の元へと還つていった。

「……つかれたー。肉体的にはともかく、精神的に疲れた」

ナイフを懷にしまい、戦闘の名残を眺める宗助の顔は少しだけ、忌々し気に歪んでいた。先程まで容赦なく魔術師達を射殺し、騎士達の首を刎ねていた宗助だが、殺しに慣れているわけでも、ましてや愉しんでいるわけでもないのだ。

「……はあ。落ち込んでないでさつさと撤収だ撤収」

悲痛な感情を振り払うように踵を返し、宗助は事務所に向かつた。

第四話 『イエーイ！』

事務所に戻る途中、宗助は一つの雑居ビルの屋上にエリカともうひとり、銀髪の少女の姿を捉えた。おそらく彼女は『剣の妖精』の異名を持つ（青銅黒十字）所属の大騎士リリアナ・クラニチャールだろう。クラニチャール家はヴォバン侯爵の信奉者ということなので間違いないだろう。それに今代の『紅き悪魔』であるエリカに同年代で対抗できるのは彼女ただ一人だとの噂だ。

その二人が戦っていた。お互いの剣をぶつけ合つて。

「ふむ。彼女はブランデッリさんに相手してもらうとして、僕は向こうの無粋な騎士の相手をするとしようかな」

二人に迫る4人の騎士達の影があつた。ビルからビルに伝つて二人に迫る。

弓矢を再び召喚。二人を囲うように散らばりはじめる騎士達に牽制のために一射撃ちこむ。と同時に振り向いた騎士に素早く連射、こちらに注意を引かせる。今ので二人の大騎士も宗助の存在には気付いたようだが、そのまま決闘を続行した。

大きく跳んで宗助に迫る騎士達。その落下地点に立ち、左手にナイフ、右手に槍を持ち、投擲の体勢で構える。着地の直前、騎士達に向けてほぼ真上に槍を投げつける。し

かしやはりと言うか、槍は剣で弾かれ、暗い空の中に消えていった。

「流石に無理だよねえ。まあ今ので一騎でも減らせるなんて甘いことは考えてないけどさ」

ナイフを逆手に持ち直し走る。今までの騎士よりもあきらかに軽装な騎士に迫る。他の三騎よりはいくらか身軽なようだが、判断力等が低下している死人の状態では体を覆う部分が少なくなり裏目に出てしまっている。

袈裟掛けに振り下ろされた剣を回避。手首を切り落とし、心臓にナイフを突き立て、引き裂く。呪力となつて消えた騎士の後ろから槍が突き出される。手段としては悪くないのだが、生憎と、来ると分かつていてる攻撃に驚く宗助ではない。突き出された槍を掴みとり、斬り離す。斬り離した槍の先端で逆に相手の喉元に突き刺す。残り二騎。微妙にタイミングをズラして斬りかかつてくる。一方の剣をナイフで弾きもう一方は回避する。回避した方の騎士の頭部を掴み膝をぶち込む。ゴツという鈍い音と共に兜ごと頭を粉碎した。ここで一旦大きく距離を取る。位置は先程とほとんど同じ位置。そしてあるうことが宗助はナイフをスーと仕舞つた。当然、騎士は恰好の獲物として宗助に襲い掛かる。だが宗助は動かない。剣が振り上げられ、

ドンッ！

騎士は活動を停止し、呪力の塊となつた。残されたのは一本の槍。先程宗助が投げた

槍だつた。もうお分かりだろう、さつきの音は槍が地面に突き刺さつた音。つまり、槍を投げたあの時、厳密には牽制のために矢を射つたあの段階から槍が降つてきたこの瞬間まで、すべて宗助の計算だつたのだ。軽装の騎士の後ろから槍が突き出されたのも、三騎目を倒したところで距離を取つたのも、宗助が計算の下、誘導されたものだつたのだ。

「うんうん。何事も思い通りにいくと気分がいいね。やつたことでイーブンだけど」雨で濡れた髪をかき上げ屋上を見やる。二人は互いの得物を下ろしていた。どうやら決闘は次回に持ち越しになつたようで、何やら話し込んでいた。というか、リリアナがエリカに弄ばれていますように宗助には見えた。

「……一声かけていこうかな？」

「このまま事務所に戻るか二人の大騎士に声をかけてから事務所に戻るか。

「よし、いこう」

屋上に向かつて地を蹴る。

片や『紅き悪魔』の名を継いだ大騎士エリカ・ブランデツリ。今回は協力関係にある。そして片やそのエリカに肩を並べる『剣の妖精』の異名を持つ大騎士リリアナ・クラニチャール。そして宗助は魔術結社の首領。互いに顔を合わせておいて損は無いだろう。これがきつかけで今後依頼があくるようになればいいなー、等と何気に色々打算を込め

て、宗助は屋上に向かつた。

屋上

宗助が着いた頃には二人の話しが終わつたようだ。

「お疲れ様ですブランデツリさん、はじめましてリリアナ・クラニチャールさん。此処、日本で魔術結社〈リマイン〉の首領を務めています、蒼桐宗助です。以後お見知りおきを」

「〈リマイン〉……？あまり聞かない名前だな」

「悲しいことに国外からはあまり依頼が来ないものでして。これ名刺です。ブランデツリさんにも、どうぞ」

「あら、どうもありがとう」
サリーが裕理に渡したものと同じ名刺を一人に渡す。名刺には

【人材派遣会社「リマイン」 代表取締役 蒼桐宗助】

とあつた。そして下にはもちろん

【迷える猫探しから荒ぶる神獣退治まで、相談事は「リマイン」まで】

という、魔術関係者からすれば信じがたいキャッチフレーズ。それを二コニコと営業スマイル全開で手渡す宗助。どう考えても詐欺にしか見えない。

「……これは本当なのかしら？私にはどうも誇張しているように見えるのだけれど」「同感だ。神獣を相手取れる程の達人がそう居るわけがない」

「よく言われます。ですが嘘は言つていませんよ。ウチは僕を含めても社員たつた六人の小規模結社ですが、内三人は神獣の相手が可能です」

神獣相手の依頼なんて二件しか来たことありませんけどね、と最後に付け足した。

「とまあ、そんな感じです。ところで、お二人はこれから護堂君の処へ？」

「そうだけど……さつきの話し、聞いてたの？」

「さつきの話し？」

「ま、まままさか、聞いていたのか！あのノートのことを！」

「ノート？何のことでしょう。僕はただ、クラニチャールさんが噂通りの方ならそうなるんじゃないかな、と思つただけなんですが」「し、しまつた！」

「リリイ、焦りは禁物よ。そんなんじや私以外でもあること、知っている人がいるかもしないわよ?」

「んん?」

頭上に無数のハテナを浮かべて首を傾げる宗助だつたが、詮索はしないでおいた。幸か不幸か、もし詮索していれば『ノート』の露見をおそれたりリアナの名剣、イル・マエストロがその光る刀身を煌めかせていたことだろう。実際のところはエリカによつてリリアナのちよつと恥ずかしい趣味が露見していたのだが。

閑話休題

「それじゃあ僕は一旦事務所に戻ります。何かありましたら、名刺の裏に事務所の電話番号が書いてありますので、そちらにお願いします。携帯、持つてますよね?」

「ええ、持つてるわ」

「ならよかつた。それでは」

軽い問答。宗助はビルの縁を蹴り、夜に紛れていった。

「ねえリリイ、彼のこと、どう思う？」

宗助の姿が完全に見えなくなつた頃、エリカは隣にいるリリアナに問うた。

「さつきの神獣云々のことか。・・・信じがたいことに変わりはない、が」

「ないけど、何？」

「一考の価値はあるかもしない」

「私もそう思つていたところよ。さつきの騎士達を相手にした時の手際、それに此処に来る前から彼は相当数の追つてが掛かつていたはずよ。神獣の件はともかくとしてもかなりの手練れということには変わりないわね」

「仮にも、若くして魔術結社の首領を務めているだけあると言うべきか。それともただ腕に覚えがあるだけのホラ吹きか。調べてみないことには分からんな」

「そうね。でもそれはあとにしましよう。今は二人の王のゲームの方が優先よ」「分かつてはいる。余計な時間を喰つてしまつたからな。急ぐとしよう

「神妙な顔つきで頷くエリカだが、すぐに気を取り直してリリアナと共に仕えるべ

き主の下へと急いだ。

二人の大騎士の疑問など露知らず、宗助はやつと事務所に戻ってきた。

「ただいまー」

社員の誰かが用意していくくれたのだろう。事務所のドアノブにひっかけてあつたタオルで頭を拭きながら宗助は事務所に入つた。

「おかえりー、社長遅かつたねえ」

「思つたより追つてがひつこくてさー。でも収穫もあつたから一応イーブンかな」「すみません蒼桐さん。私だけ避難してしまつて・・・」

出迎えたのはサリーと裕理だつた。裕理の場合は出迎えと少し違うが。

「いいつていいつて、万理谷さん。これが今回の僕たちの仕事なんだから。それよりサリーサんに変なことされなかつた?」

「？いえ、特には何も」

「そつか。なら良かつた。サリーさんは時々めんどくさがつて仕事を誰かに押し付けることがあるからね。客人にまでそんなことをしていたら目もあてられないよ。ね、サリーさん？」

「流石にあたしもそこまでひどくはないよ。で？ 収穫つて何があつたのさ」

実際に被害にあつたことがあるのか、少々厭味っぽく言う宗助だつたが、サリーはどこ吹く風という風に受け流し、収穫の中身について催促した。

「なんと！ 〈赤銅黒十字〉と〈青銅黒十字〉の大騎士に名刺を渡せた上に顔を憶えられたんだ！」

「なんだつて!? それじゃあ——」

何やら二人のテンションが上がりだした。

「そう！ この一件で活躍すればもしかしたら歐州の結社からも依頼が来るようになるかもしねない！」

「これで赤字経営から抜け出せる!!」

『イエーイ！』

最後にはハイタツチまで決めてしまった。裕理は完全に空氣である。

「なにをバカやつてるのよ。ほら、裕理ちゃんが困つてるじゃないの」

制服姿でマグカップを片手に現れたのは、いまだ登場していなかつた最後の社員、高杉弥生。裕理と違つて少し濃く長い茶髪が特徴の鍊金術師だ。

『N O 赤字 Y E S 黒字!』

しかし、弥生の言葉などなんのその。意味の分からぬことを叫んではしゃぎ続ける社長と副社長。大丈夫だろうかこの会社。

「はあ・・・」

ため息とともにマグカップを置き、そして

ゴツ!! ゴツ!!

無言で机の上にあつたやたら厚い本を持ち上げ、その角で宗助の頭を打ち抜いた。二回も。

「いつたああ!? てかなんで二回!? しかも僕だけ!」

あまりの激痛に蹲る宗助だったが、流石はカンピオーネ、すぐに立ち上がりつて抗議した。

「どうか今呪力で筋力強化しただろ!」

筋力強化だけでカンピオーネが蹲るほどのダメージを負わせるとは、恐ろしい、なるべく逆らわないようにして、とサリーは裕理の後ろに退避しながら思つていた。

「ごめんなさいね、うるさい社長と副社長で」

頭を押さえて叫ぶ宗助を無視して弥生はいたつて笑顔で裕理に話しかけた。

「それほどでは。あの・・・貴女は？」

「私は高杉弥生。こここの社員で、鍊金術が専門ね。でも他にも幾らかできるから幅は効くわよ」

制服を着ていることから弥生が学生だということは疑いようもないが、裕理には弥生が成人した女性に見えた。

「無視？ 僕無視されてる？」

「もう、少し静かにして頂戴。あとサリーサン」

「ギクツ」

「今逃げてもあとで説教よ」

「勘弁「しない」・・・がつくし」

「サリーさんも年考えなさいよ。今年で幾つだっけ？」

「・・・エート、タシカ29 「ダウト」 そんな！ 社長まで！」

「いや、だつて・・・ねえ？」

サリー・ウイルソン。御年80を超える世界でも屈指の魔女である。一流の魔術師は呪力で自らの肉体年齢を若返らされる。それは女性の方が顕著だ。有名所ではイタリアはサルデーニヤ島のルクレチア・ゾラあたりだろうか、それでも60歳だ。80歳な

ど聞いたこともない。

「80歳!」

「ああー、バレた・・・」

あまりの真実に今まで二、三言しかしゃべっていらない空氣だつた裕理が声を上げた。
「・・・まあ色々あつてさ。此處にはなんだかんだで9年くらいいるんだよ」

「ウチの社員には以外とビックリな体験をしてる人がいるからね。僕は慣れたよ」
(あまり慣れたいとは思いませんが・・・)

思つたが口には出さなかつた。

「んじゃあ、僕は着替えてくるから何か聞きたいことがあつたら弥生さんに聞いてみて」
いまだにずぶ濡れ状態だった宗助はそう言い残して階段を登つていった。

「社長!」
それから5分もたたない内に

三階の部屋の片隅で着替えていた宗助に階下から声ががかかった。弥生だ。

「どうしたの？」

「靈視よ。侯爵の権能について裕理ちゃんに靈視が降りたの」

「すぐ行く！」

一旦部屋に戻り、ネクタイを締め、ナイフを装備してから、急いで宗助は下へ駆け降りた。